

【連載】

北のサクラ

彩る

歴史と文化

第1回

城下町・松前の八重桜



森林インストラクター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として小樽、釧路、函館などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。2016年森林インストラクターの資格取得。現在、日本森林インストラクター協会会員、道新文化センター講師。

サクラはこれから紅葉の季節を迎え、休眠に入ります。そして雪解け後、木々が文字通り桜色に染まり、春を待ち焦がれていた人々の心を躍らせます。

サクラをめぐる習慣が始まったのは平安時代。野山に自生するサクラを庭に植え替え、貴族たちがその風情を楽しむ宮廷文化に端を発します。一方、農村でもその年の豊作を願い、山桜の下で飲食をする習わしがありました。

そうした風習が次第に大衆文化として庶民の生活に溶け込んでいきます。サクラの木々に囲まれ酒宴を繰り広げる花見は日本独特の文化です。

城下町として早くから栄えた道南の松前では、江戸時代に植えた八重桜が町のシンボルとして大切に育てられ、花見の主演となっています。

シンボルの血脈桜

「250種、1万本の桜」とうたう松前公園。なんといっても最大の特徴は種類の豊富さです。4月中旬から5月下旬まで、早咲き、中咲き、遅咲きとさまざまな花を楽しむことができます。

この多品種の背景にあるのは、北前船で関西との交易が盛んだったことや、参勤交代で江戸との往来があったことです。人や物が行き来する場所では、いろいろな知識や情報も手に入ります。その結果、より美しく珍しいサクラを求めるようになりました。

美しさを象徴しているのが、松前城の北側にある光善寺の「^{ぜんじ}血脈桜^{けちみやくぐら}」です。高さ8^{メートル}、横幅17^{メートル}の古木で、本州から持ち込まれ、樹齢は300年を超えると推定されています。



咲き誇る光善寺の血脈桜

八重桜で栽培品種名は「^{まつまえはやさき}松前早咲」ですが、一般的には「^{なでん}南殿」と呼ばれています。淡いピンク色の大輪は気品すら感じさせます。その血脈桜には次のような伝説があります。

昔、松前の鍛冶屋の父と娘が関西に旅行に出かけ、美しい尼からサクラの苗木をもらって帰ります。光善寺に献納し、人々を喜ばせたのですが、寺の本堂を建て直す際、大きくなりすぎたため伐採することが決まります。

ところが、前夜、住職の枕元に乙女が現れ、「血脈をください」と懇願します。血脈は死人が仏になれるよう僧侶が与える書簡です。住職はお経を唱えて血脈を渡しました。翌朝、その血脈はサクラの木にあったのです。驚いた住職は伐採を中止し、大切に育てることにしたということです。

1887（明治20）年創刊の北海道毎日新聞は翌年5月15日、「光善寺本堂前にある血脈桜と称する名樹あり是は福山（現松前）一等の誉と云うべき花」と紹介しています。

この名木を函館出身の作家宇江佐真理さんは小説「血脈桜」で取り上げました。松前藩主の正室光子が光善寺を訪ね、「血脈桜の前まで来ると、光子は感歎の声を上げた。幹が途中から二つに分かれた樹は、思うままに枝を^{ひろ}げ、びっしりと花を付けた様子は圧巻だった」と表現しています。

そして、あとがきで「緑の^{こけ}苔の上に大きく枝を^{ひろ}げた桜は、北海道の桜というより、どこか京風の匂いが感じられます」と記しています。

松前桜の生みの親

松前の桜見物はすでに江戸時代から始まっており、1888（明治21）年5月18日の北海道毎日新聞は「観桜の遊歩人は当時不漁にも係はらず陸続と出掛け朝より晩まで引きも切らず」の状態で、「茶屋割烹店^{かっぽう}は上景気なり」と伝えています。

不漁とはニシン漁のことです。漁を終えた網元の漁師が別れの酒盛りをしたり、実業家が使用人を慰労する宴会を開いたりし、花見へと発展していきました。

松前に置かれていた松前支庁は1903（明治36）年に廃止され、函館支庁に統合されます。これに伴い、豪商が次々と函館や小樽、釧路へ転居します。ニシンも不漁となり、マチは衰退し、けんかも絶えませんでした。

そんな中、サクラに活路を見いだそうとしたのが地元出身の鎌倉兼助^{かまくらかねすけ}です。1907（明治40）年に役場勤めとなり、出張で函館を訪れた際、函館公園のサクラを



鎌倉兼助頭彰碑の肖像レリーフ

見物します。咲き誇る木々の下で、人々が三味線や太鼓を鳴らし花見に興じる光景に驚かされました。

「松前にもサクラがほしい。平和が必要だ」と痛感した鎌倉は、住民の心を一つにするため、サクラの植栽に取り組みます。松前では明治維新後、大きくなったサクラの木は日陰ができ邪魔だなどの理由で伐採されていました。

伝統ある南殿などのサクラを接ぎ木で増やすため1917（大正6）年には、東京から台木となるソメイヨシノの苗木を30本購入します。接ぎ木は成功し、3年目には花のつぼみができるまでになりました。

さらに圃場^{ほじょう}を造るため、クマザサの密集地を開墾します。休日のみならず、平日の出勤前や退庁後にもクワを手にししました。「公務多忙なときでも、朝は三時半起床、夜は十時就寝」（北海道新聞1957年5月12日）という毎日でした。

台木の確保にも腐心しました。富士山の中腹に寒さに強い木があると聞き、さっそく現地へ向かいます。付近の吉田口まで行きましたが、旅館の主人から「危険だからやめた方がいい。私を取り寄せて送ってあげるから」と諭されます。

代金を前払いして帰ると翌年、20本の苗木が届きました。生育が良く、順調に育ち、台木の心配もなくなります。ところが、今度は盗掘する不心得者が現れ、ガス灯をぶら下げ深夜まで見回りする苦労が続きました。

鎌倉は毎年、さまざまな苗木を自費で公園に200～300本も植える活動を1955（昭和30）年ごろまで継続します。その間、役場では助役、収入役という要職を務めていました。

こうした献身的な努力が評価され、1965（昭和40）年には名誉町民第1号に選ばれます。松前公園には肖像レリーフをはめ込んだ顕彰碑が建立され、翌年除幕式が行われました。その2年後の1968（昭和43）年、90歳で亡くなります。

観光振興を託され

松前公園では1933（昭和8）年ごろから、夜桜見物のため電飾が行われていましたが、日中戦争が始まると翌年の1938（昭和13）年には中止されました。

戦後、花見への期待は高く、1947（昭和22）年には早くも第1回のさくら祭りが開催されます。しかし、電力不足のため、町民に家の電気を消し、公園で夜桜を楽しむよう呼びかけました。夜の公園では野外映画会、のど自慢大会などの行事が繰り広げられました。



サクラに囲まれる松前城

公園内の松前城は1949（昭和24）年に焼失し、復元したのは1961（昭和36）年です。これを機に、町は周辺地域を整備し、観光客の誘致を目指します。

その一環として「教育植物園」づくりが浮上し、調査の一員に委嘱されたのが浅利政俊^{あさり まさとし}さんでした。1953（昭和28）年、松前町内の小学校に新卒で赴任した浅利さんは、サクラに魅せられ町内の木々を調べていました。

結局、植物園はサクラをテーマとする教育、研究施設の「桜見本園」に変更され、浅利さんも基本構想の策定に加わり、1965（昭和40）年にオープンします。



品種が充実している桜見本園

浅利さんは当時、新品種づくりに取り組んでいました。町内に多い南殿は八重咲で種子が付くのはまれですが1959（昭和34）年夏、児童たちと種子を集めて回りました。それを苗床で育てると翌年、芽が10本出ました。

苗木を接ぎ木で増やしたところ、南殿とは違う形質のサクラが現れました。花卉が南殿より2倍も多い八重桜です。それが新品種第1号となり、「松前綾錦^{まつまえ あやにしき}」と命名しました。

以来、自然交雑に加え、異なる品種を人為的に交配させるなどして100以上の新品種を誕生させました。そのほとんどは八重桜です。種子ができることが少ないため、品種改良は簡単ではありません。長年の功績は国内外で高く評価されています。

桜見本園は当初、サクラが60本ほどしかありませんでしたが、静岡県三島市の国立遺伝学研究所や「サクラの通り抜け」で有名な大阪の造幣局、日本花の会などから珍しい品種を譲り受けたほか、浅利さんが生み出した新品種も加え、110種300本にまで充実しました。さらに、1979（昭和54）年には新桜見本園も造成され、新たに100種110本のサクラが咲き誇る花園となっています。

国際交流に努める桜守

1972（昭和47）年の日中国交正常化の折には、浅利さんが行政に働きかけ、記念の品として松前の南殿や関山など5品種10本の苗木を北京市に贈り、喜ばれました。

1993（平成5）年、英国の王立公園から苗木の購入希望があった際には、第2次大戦中、函館の捕虜収容所で英国人に過酷な労働を強いたことへの償いとして、自身が作出したサクラ58種を無償で寄贈しました。以来、松前のサクラは英国各地に普及し、このうち19種が卓越した品種だとして英国王立園芸協会の「ガーデンメリット賞」に選ばれました。

2016（平成28）年には同協会の会員が来日したのを記念し、浅利さんが建立した「日英讃桜文化友好親善記念碑」の除幕式が公園内で行われました。碑の表には友好親善の歴史、裏には同賞を受賞したサクラ19種の名前が刻まれています。2018（平成30）年にはこのサクラを紹介する写真パネルが碑の両脇に設置されました。

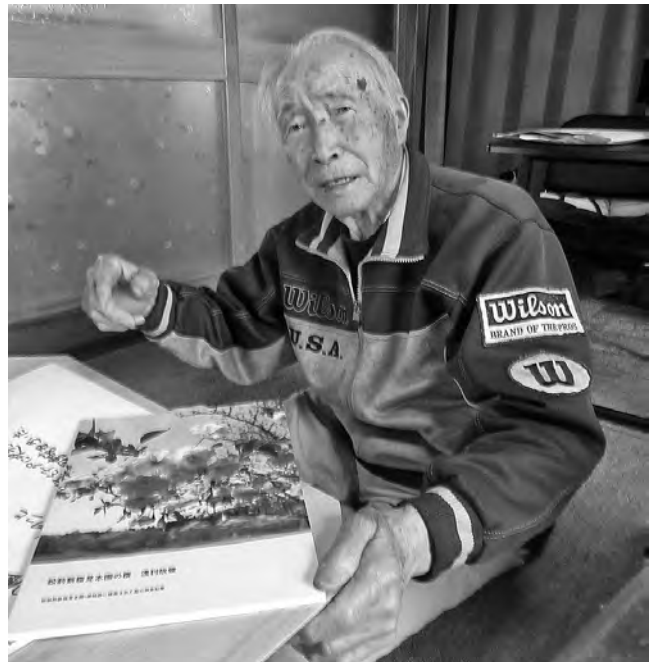


中央が日英讃桜文化友好親善記念碑

浅利さんはこのほか、ブラジル、ポーランド、米国などへも苗木を寄贈しました。また逆に、英国、米国産のサクラも贈られ、見本園で咲いています。2023（令和5）年には英国のサクラ研究者が視察に訪れ、浅利さんらと親睦を深めました。

浅利さんは2005（平成17）年、日本さくらの会の「桜守」に選ばれ、2010（平成22）年には北海道地域文化選奨特別賞、翌年には北海道新聞文化賞を受賞します。

95歳の今も、サクラへの愛情は衰えません。長い経験で実感したのは、桜花の美しさが日本だけではなく、世界の人々を魅了することでした。サクラの果たす役割は大きいだけに、国際交流を推進するには「松前が国際化しなければならない」と願っています。



サクラの魅力を語る浅利政俊さん

<主な参考資料>

- ・白幡洋三郎「花見と桜」八坂書房、2015年
- ・宇江佐真理「血脈桜」『蝦夷拾遺 たば風』文春文庫、2023年
- ・野呂希一撮影、浅利政俊解説「北国の桜」ノースランド、1995年
- ・鎌倉兼助「北海道開発振興功労者の声」（録音資料）北海道立図書館所蔵、1965年
- ・武田勇作「明治の花見あれこれ」『松前藩と松前 松前町史研究紀要』第27号、松前町史編集室、1987年
- ・松前町史編集室編「松前町史 通説編第二巻」松前町、1993年
- ・浅利政俊「私のなかの歴史 花のもとにて我生きん」北海道新聞夕刊2006年5月8～22日